四国民話オペラ「二人奥方」あらすじ

第一場

時は、むかしむかし、そのむかし。四国のあるお城に、気の強い奥方と、気の弱い殿様が住んでおりました。ある朝殿様が、お目覚めになると、大広間に奥方がふたりも座っています！きっと、どちらか狐が化けた偽物に違いありません。見極めようと近づいた殿様は、二人の奥方の諍(いさか)いに巻き込まれ大騒ぎ。困った殿様は、知恵者で信頼厚い御殿医を呼び出します。

二人の奥方の前にやってきた御殿医に向かって二人とも、もう一方が偽物だと喚(わめ)き散らします。御殿医は、様々な診察や様々な策を講じますが、なかなか狐は尻尾を出しません。しかし、しだいに二人の違いが見うけられるようになります。気が強く、気が利かない奥方と、気が優しく、気が利く奥方。殿様にはどちらが偽物か判ってきますが、なぜかそのことを言い出しません。そこにたくさんのいなりずしが運ばれると、奥方たちは、物凄い食欲で食べ始めます。隙を見せた偽の奥方（狐）は、とうとう尻尾を出してしまいます。

怒った奥方（本物）は、偽の奥方（狐）を「火あぶり、打ち首にせよ」と騒ぎ立て、偽の奥方（狐）を縛り上げ城下はずれの処刑場へと連れていきます。

第二場

なぜか偽の奥方（狐）を案じ、あたふたする殿様。木に縛り付けられた偽の奥方（狐）は、殿様に人と狐の恋の伝説の主人公：信太の白狐（葛の葉・安倍晴明の母）が詠った歌を歌います。その歌に思い余ってとうとう助けようとする殿様、そこに火のついた松明を持った奥方（本物）たちが現れます。止めようとする殿様、火をつけることを躊躇する腰元たち、怒った奥方（本物）は、松明を取り上げ、自ら焚き木に火をつけようとします。

そこに念仏らしき声が聞こえ、老僧と子供たちが現れます。それは、なんと！狐の長老と狐たちでした。火あぶりにされそうな偽の奥方（狐）の命乞いに現れたのです。

皆の必死の命乞いにも全く聞く耳を持たない奥方（本物）、それどころか狐たちを全員捕まえようとします。追い詰められた狐の長老は、大きな声で呪文を唱えます。するとどうでしょう、奥方（本物）のお尻に尻尾が生えだします。そして処刑場は大混乱となります。その間に、狐の長老は詫び証文を殿様に渡し、「二度と狐は、この地（四国）には住まない」と約束し、狐たち全員を引き連れ去っていきます。

狐たちが去ったあと、奥方（本物）の尻尾は無事取れますが、奥方（本物）は気が収まらぬ様子。一方、殿様は狐たちを笑って見送るのでした。

四国民話オペラ「二人奥方」との出会い・解説

オペラ「二人奥方」の存在を知ったのは、2003年当時、香川県の芸術祭委員長をされていた八木亮三氏から渡された古い資料によるものでした。それは古びた一冊の本とプログラム。『「脚本＝龍の子太郎・うぐいす姫ほか」著：瀬川拓男』と『香川二期会10周年記念コンサート(1965)』のプログラム。その本には、瀬川氏が台本を書いた音楽人形劇、オペラ作品などの概要が紹介され、香川で発表されたオペラ「二人奥方」の概要を説明したページが含まれていました。また、プログラムには、初演となる合唱曲、民話による重唱曲集、そしてオペラ作品「二人奥方」の記載がされていました。

この時まで、香川で創られた最も古いオペラは、1997年「国民文化祭かがわ1997」にて、創作されたオペラ「龍神の玉～海女の珠とり物語～」と思っていましたが、その古びたプログラムにはオペラ「二人奥方」の公演年が1965年と記載されていたことから、このオペラ作品こそ香川、いや四国で最初に創られた作品であることがわかりました。

オペラ「二人奥方」は、1965年2月21日 高松市市民会館にて香川二期会よって初演されたものでした。香川二期会とは、既に、東京でオペラ事業を始めていた「二期会（現：東京二期会）」にあやかって付けた名称であり、その「二期会」は1952年、東京にて当時の活躍中の声楽家により結成された団体です。それまでの声楽・オペラ活動を一期と考え、これからの次世代が創る声楽・オペラ活動を二期と考え付けられた名称です。この「二期会」の精神を、貧しくとも心としていこうとする香川県下の音楽家・芸術家の有志によって1954年4月に設立されたのが香川二期会でした。現在も香川二期会の合唱団（香川二期会合唱団）が、香川県の主要な合唱団として活躍しています。

その香川二期会が10周年を迎える年の記念公演として「四国の民話・民謡に取材した洋楽様式による現代化」を試み、その中で新作のオペラ公演を計画しました。当時、会長の藤原高夫氏（香川大学助教授）から、作曲家・音楽評論家として有名であった菅野浩和氏に作曲依頼がされました。菅野氏は、当時、新作オペラを次々と発表し、日本オペラ界では期待された人物でした。また台本の瀬川拓男氏は、菅野氏と組んですでに3本のオペラ作品を創作し、「二人奥方」は、4本目の作品となりました。「二人奥方」発表の2年前（1963年）には、菅野・瀬川氏によるモノ・オペラとして話題を呼んだ「安達ヶ原の鬼女」が邦楽四人の会によって発表されています。この作品の原作は能の演目でもある謡曲「黒塚」であり、福島県二本松市安達ヶ原地方にまつわる「安達ヶ原の鬼婆」という有名な伝説でした。

瀬川氏は、人形劇やオペラの脚本以外にも、日本の民話の編集・研究を行い、人形劇・オペラの題材としても活用していました。その中には1961年にNHKよりTV放送された人形劇「龍の子太郎」、1964年TBS「龍の子太郎」などがあります。

当時の日本オペラ活動は、都市部の東京・大阪・京都のみであり、地方でのオペラ制作は、皆無の状態でした。そのような中で、香川の先人たちは、県内の主要な芸術団体・文化人たちと協力し、このオペラ制作事業を成し遂げました。この功績は非常に大きなものです。このオペラ「二人奥方」こそ、私たちの先人たちが残した「四国の貴重な音楽文化財」と言えるでしょう。

文：若井健司